

テディベアプロジェクト

学習効果と指導者のあり方

NPO 法人グローバルプロジェクト推進機構 (JEARN), 植田泰史, 畑井克彦, 佐藤等史
hiroc@ma8.seikyuu.ne.jp, katu@po.iijnet.or.jp, h-sato@jearn.jp

1. はじめに

テディベアプロジェクトは、国際協働学習を推進する国際的教育 NPO、iEARN (アイアーン)⁽¹⁾が実施している国際協働学習プロジェクト⁽²⁾であり、数ある iEARN のプロジェクトの中でも、日本国内では最も多くの学校が参加、世界的にも非常に人気がある⁽³⁾。また多くの先生方により実践報告もなされている⁽⁴⁾。

ただこれらの実践報告は、自身の体験の報告やプロジェクトの流れの説明にとどまっており、その中には子どもたちの変化やプロジェクトの学習効果も記載されてはいるものの、他の実践報告との共通項を見出すような分析は行われていない。そこで本論文では、多くの実践報告の共通項をまとめ、分析を加えることを目的とする。

研究手法としては、テディベアプロジェクトの特徴を、実践されている 3 名の教師へのインタビュー、および発表済みの実践報告から抽出を図り、抽出された特徴を基に、プロジェクトの学習効果、波及効果と実施における成功要因を考察する。

2. テディベアプロジェクトについて

2.1. プロジェクトの概要

テディベアプロジェクト⁽⁵⁾は、2 カ国の学校でペアとなり、ぬいぐるみの「テディベア」を交換留学生として、お互いの交流相手校へ送りあうことから始まる。ぬいぐるみを受け取ったお互いの学校の子もたちは、テディベアに代わって、テディベアの毎日の生活を日記や写真などで交流相手校へ報告する。毎日の生活では、授業や学校行事への参加、子どもたちの各家庭へのホームステイなどが行われる。そして一定期間が過ぎたところで、交流相手校から送られてきたテディベアを帰国させ、自分たちが送ったテディベアが戻ってきてプロジェクトは終了する。

「テディベア」からの毎日の報告は、交流相手校や相手国の日常生活や、書き手である子どもたちの考えなどを知る教材となる。

プロジェクトの必須事項は、(1) ぬいぐるみを送りあう、(2) 何らかの方法で相手に報告をする、である⁽⁶⁾。この単純さはプロジェクトの拡張性の高さを生み出し、多くの実践においては、交流相手校とのテレビ会議の実施や地元との地域交流の要素が加わっている⁽⁷⁾。実施される教科も、総合的な学習の

時間のみならず、英語、情報、社会、美術などでも行われている。

2.2. 参加校数の推移

国内の参加校は、1995 年からしばらくは 10 校に満たなかったが、各学校にインターネット回線が整備され、交流がしやすくなるとともに参加校も増加、ここ 3 年間では、2001 年 20 校、2002 年 30 校、2003 年 50 校ほどが実施している⁽⁸⁾。この 3 年間でテディベアプロジェクトの知名度も大きく高まっているため、2004 年は 100 校ほどの参加が見込まれている⁽⁹⁾。

参加校の国内分布は、西高東低傾向が見られるものの、全国各地より参加がある。

3. インタビューに見るプロジェクトの姿

3.1. 研究の手法

本論文では、テディベアプロジェクトを実践された教師にインタビューを行い、そのインタビュー内容を主要な資料として、発表された実践報告も参考にしながら、それぞれの実践における共通項を抽出し、まずはプロジェクトの特徴を把握する⁽¹⁰⁾。そして抽出されたプロジェクトの特徴から考察を広げ、プロジェクトの教育効果、波及効果、成功要因の把握を試みるという分析手法を採用する。

インタビューは、3 名の教師に対し、2004 年 2 月中旬にそれぞれ 2 時間ほどずつ行った⁽¹¹⁾。質問項目等は特に定めず、こちらの関心のみを伝え、自由に話していただく方式を採った。

インタビューに協力いただいた 3 名の教師は、長年このプロジェクトを実践し国内でも有数の実績がある小学校の A 氏、テディベアプロジェクトの実施回数は数回だが、その他の iEARN プロジェクトの実践も多い中学校英語の B 氏、テディベアプロジェクトを 1 回実施し、2 回目を準備中である中学校英語の C 氏である⁽¹²⁾。

3.2. プロジェクトの特徴

テディベアプロジェクトの特徴として、インタビューの内容からは、(1) 具体的な「もの」を送る、(2) 交流の仕方が自由自在である、(3) 交流期間を明確に定めることができる、(4) 教室内に留まらない、の 4 点が浮かび上がった。

3.2.1. 具体的な「もの」を送る

A 氏、B 氏、C 氏ともに述べていることだが、感情移入できる「ぬいぐるみ」を送ることによって、子どもたちは自分たちの「代表」が交流相手校へ行っていると意識できる、という。この結果、テディベアの視点で書かれた日記は、相手の報告ではなく自分たちの代表の報告となるため、印象が強くなり、相手からの手紙、写真、贈り物なども相手のことを見て聞いて知る教材として、より強い学びの意欲を生み出すこととなる。3 名ともに子どもたちが学習に対して積極的になったと述べているが、それも強い学びの意欲が生まれたことを示していよう。

また B 氏によると、ぬいぐるみを持っている人が主役になれるため、必ず全員が交代で日記を書くようにすれば、全員が主役になれる参加しない子どももいなくなる、とのことである。

3.2.2. 交流の仕方が自由自在

これは、A 氏の、このプロジェクトは交流の仕方についての子どもたちのどのようなアイデアも取り込むことができる、との発言から抽出した特徴である。その他、子どもたちの自発性の芽を摘み取ることがない、どんなアイデアも試してみることができる、という発言も A 氏からあった。ぬいぐるみは文句を言うことも、嫌がることも、裏切ることもないので、その点でもアイデアは自由である、という。

3.2.3. 交流期間を明確に定めることができる

この特徴は、国際交流はともするとダラダラと続けてしまい、そのままフェードアウトして相手への関心を失うことがあるが、これを避けられる意味で重要であるという C 氏の発言から抽出した。B 氏も、交流の終了を印象付けると、次の交流を求めるようになる」と述べている。

また、C 氏によると、プロジェクトの進行中は、学習効果の測定が難しいが、交流の終了を明確にするとこれも行いやすいそうである。したがって子どもたちも自分たちの行ったことを見直す機会を得たという。

3.2.4. 教室内に留まらない

この点は、A 氏、B 氏、C 氏ともに述べているが、交流相手校が海外にいるため、自分と違う見方をプロジェクトを通して意識することができる、という。

さらに A 氏、C 氏からは、ぬいぐるみという具体的な来訪者がいるので、他のクラスの子ども、両親、学校の周辺の人たちが興味を持って見に来たり、行動を聞きに来たりする効果がある、との発言があった。特にテディベアが各家庭をホームステイするようにした場合、子どもたちのテディベアを持って登下校する姿が、多くの人に注目される、という。そういう意味では、この特徴は具体的な「もの」を送

るという特徴の派生的なものとも考えられる。

3.3. プロジェクトの学習効果

次に、抽出されたプロジェクトの特徴から、プロジェクトの学習効果について考察してみたい。考察の結果、浮かび上がってきたのが、(1)「個人」を育てる、(2)「絆」を築ける、(3)自分の「立ち位置」が分かる、という学習効果である。

3.3.1. 「個人」を育てる

これは、交流の仕方が自由自在であることから、子どもたちがテディベアとの交流のドラマを自由に演出でき、またドラマが実現できる喜びも知ることができるため、生まれる効果である。さらに、実施したドラマに対し交流相手や周りの感想を聞くことで、評価を得ることもできる。これらの特徴が、自尊心や自己有用感を育てると考えられる。

また、具体的な「もの」があることで子どもたちは全員が主役になれる、という発言があったが、この特徴も「個人」を育てる学習効果につながっているであろう。

3.3.2. 「絆」が築ける

この学習効果は、相手校から来た大事な友達であるテディベアとどう付き合うかを考えることから生まれると考える。

交流の仕方が自由自在であり、感情移入できる「もの」があることで、子どもたちは大事な友達とどう付き合うか、どうもてなすかを疑似体験できる。そしてその報告を相手に日記で知らせることで、相手の反応を知ることができる。実社会では、交流のアイデアを実施する前に相手が嫌がってしまい実現できなかった、というケースも多いが、このプロジェクトでは実際に一度やってみて、その後には評価を聞くことができる。

また、ホームステイで家族にどうもてなしてもらおうか企画し、実行するために親にお願いする行為が、他の人との協働を覚えることにもつながる。

さらに C 氏によると、プロジェクトの実施で交流相手校とのコミュニケーション欲求が高まるという。これは特に英語で交流を行っている場合、自ら英語を積極的に学ぶようになるという効果を生む。

3.3.3. 自分の「立ち位置」が分かる

この学習効果は、主にプロジェクトが教室内に留まらないという特徴、すなわちこのプロジェクトを通して交流相手校の子どもたち、同じ学校の他のクラス、家族や地域の人たちとのコミュニケーションが行われ、結果として自分のことを学ぶ機会になることから生まれる。また A 氏は、自分たちのこと、学校、地域、国を交流相手校にどのように伝えるか考えることが勉強になったといい、C 氏は、交流相

手校からの日記や贈り物によって、文化的な共通項を見つける観察眼が養われた、と述べている。

さらに、このプロジェクトは日常の延長線上での交流であるため、特別な舞台を作ったお仕着せでない交流が行え、相手国に対し自分たちが持っていたステレオタイプを払拭することができるという効果もある。

3.3.4. 「点」と「線」と「面」の教育

これらの効果は、「個人」=「点」、¹「絆」=「線」、「立ち位置」=「面」とも捉えることができる。このプロジェクトが「点」「線」「面」という、様々な角度を全方位的に学び体験することができることを示している。

3.4. プロジェクトの波及効果

ティベアプロジェクトは、A氏によると、子どもたちよりも教師の方が学ぶことの多いプロジェクトだという。

プロジェクトの特徴にもあるように、交流の仕方が自由であるため、教師は子どもたちの想像力、構成力、実現力などいろいろな力を知り、教師の考えを子どもたちが超える経験を何度もすることになる。

また教室内に留まらないため、保護者や地域の方々と一緒に子どもを育てる実感を得られる。教師の中には他人、例えば同僚の教師、保護者、地域の方々々に依頼することをためらう方もいるというが、助けを求めれば地域もボランティアも快く助けてくれることを知るの、よい体験になる。教師はこれらの体験を通して、保護者や地域の方々との協働が思っている以上に簡単で楽しいものであることを知る。

さらに、地域との交流により、学校に対する保護者・地域の期待を知り、教師は学びの場としての学校の役割を知ることができる。

これらは、いわば子どもと共に育つ「共育」であり、「協働」を知り、「学校」を知ることである。このキーワードは、プロジェクトの学習効果同様、「点」（「共育」）、「線」（「協働」）、「面」（「学校」）と捉えることも可能であろう。

3.5. プロジェクト実施における成功要因

さらに、抽出されたプロジェクトの特徴から、プロジェクト実施における成功要因について考察を行った。考察の結果、プロジェクトの成功要因として抽出されたのは、主に実施する教師に対するものだった。

このプロジェクトでは、教師はまず、他人に対して援助の依頼ができなければならない。プロジェクトの拡張性が高いがゆえに、子どもたちはプロジェクトを柔軟な発想でさまざまに展開させる。その際、教師の守備範囲を超えることもある。このとき、他の教師、地域の方々、翻訳ボランティア、支援組織

である iEARN に支援を求められるかどうか、が成功を左右する。なにより多くの人を「巻き込む」ほうがより面白いプロジェクトに発展することから、多くの人をネットワーク化し、プロジェクトをコーディネートする力が教師に求められる。

次に、教師には、プロジェクトが自身が引いたレールの上から脱線しても、それを許容し時には楽しむ度量が必要となる。子どもたちが自発的に学ぶ過程においては、教師の想像を超える企画に発展することもある。その際にも、中止させずにそのアイデアを活かしていく方法を考えることが求められる。

4. 終わりに

本論文では、インタビューからティベアプロジェクトの特徴、学習効果、成功要因の抽出を試みた。結果、特徴としては(1)具体的な「もの」を送る、(2)交流の仕方が自由自在である、(3)交流期間を明確に定めることができる、(4)教室内に留まらない、という4点、学習効果としては、「点」「線」「面」という全方位的な学びが出来ること、成功要因としては、(1)教師は他人に対して援助依頼ができなければならない、(2)プロジェクトが教師が引いたレールを脱線しても教師は許容しなければならない、という、主に教師に対するものが2点、抽出された。

むしろ、これらの結果は、分析の客観性の点で問題を残し、他の解釈がないともいえない。またインタビューを行ったのが3名であることは、少ないとの批判もあるだろう。今後の研究においては、今回の分析を参考にしながらも、プロジェクトに対する更なるデータ収集、分析の必要がある。特に今回、インタビューに応じてくださった3名は、ともに概ね成功した体験を基に話してくださったが、もしプロジェクトの失敗経験を持つ教師にインタビューをしていたら、より分析の精緻化が図れたであろう。今後の課題としたい。

なお、インタビューに応じてくださった3名の先生方、およびグローバルプロジェクト推進機構理事長 高木氏には、研究のデータ収集、分析において過大なるご協力をいただいた。ここに感謝の意を表す。

(注)

¹ 正式名称は、International Education And Resource Network。1985年ニューヨークとモスクワ間で高校生を衛星中継のテレビ会議によりつなぎ、話し合いを通して友情を育み、争いの愚かさを知ろうという活動からスタートした。現在は世界約100カ国が参加し、国際理解教育を実施、支援、推進している。なお日本では、iEARNの日本センターである特定非営利活動法人(以下NPO法人)グローバルプロジェクト推進機構(英語名、ジェイアーン:JEARN)がこれらを支援する。詳しくは次

のウェブサイト参照のこと。

iEARN <http://www.earn.org/> (英語)

JEARN <http://www.jearn.jp/> (日本語)

- ² iEARN の特徴は、「国際協働プロジェクト」と呼ばれる、2カ国以上の子どもたちが一緒になって何かを作り上げる(議論の結果であれ、創作の結果であれ)プロジェクトを通して、国際理解教育(異文化理解教育)を実施することである。このため、プロジェクト終了後、明確な成果物が残る。プロジェクトの内容は各国の先生方、iEARN 関係者が提案し、毎年行われる iEARN の年次大会で採択される。2003 年度は、日本で行われた年次大会により 158 のプロジェクトが採択、実施された。なおテディベアプロジェクトの提案者は、オーストラリアの Bob 氏である。
- ³ 2004 年 2 月段階で約 70 カ国、クラス数では 2,600 クラスが参加。これは iEARN の数あるプロジェクトの中でも、最も多い参加国数である。なお参考までに 2004 年 2 月段階の参加国は、Argentina, Australia, Azerbaijan, Bangladesh, Belarus, Brazil, Brunei, Bulgaria, Canada, Chile, China, Cuba, Czech Republic, Denmark, Deutschland, Ecuador, Egypt, Estonia, Finland, France, Germany, Ghana, Greece, Guatemala, Hong Kong, India, Indonesia, Iran, Ireland, Israel, Italy, Jamaica, Japan, Jordan, Kazakhstan, Kyrgyzstan, Latvia, Lebanon, Lithuania, Mexico, Mongolia, Morocco, Netherlands, New Zealand, Nigeria, Pakistan, Peru, Philippines, Poland, Portugal, Puerto Rico, Romania, Russia, Singapore, Slovakia, Slovenia, South Africa, South Korea, Spain, Sri Lanka, Suriname, Sweden, Switzerland, Taiwan, Thailand, Uganda, Ukraine, United Arab Emirates, United Kingdom, United States of America, Uzbekistan, Vietnam, Zimbabwe, などである。
- ⁴ 例えば、村上(2002)、岸原(2003)、森田(2003)、納谷ら(2003)を参照のこと。
- ⁵ テディベアプロジェクトについては、次のウェブサイトも参考にした。
<http://www.jearn.jp/iEARN/teddyinmie/> (日本語)
<http://www.earn.org.au/tbear/> (英語)
- ⁶ この必須事項に従うならば、テディベアプロジェクトは、国際交流だけではなく国内交流としても実施可能である。実際、国内間での交流に活用し成果を挙げたという事例も存在するが、本論文では、iEARN が「国際交流」を目的の 1 つとしてこのプロジェクトを実施している点を尊重し、このプロジェクトは日本以外との交流を行うものであることを前提に、論を進める。
- ⁷ この拡張性の高さこそが、まさにこのプロジェクトの特徴であるわけだが、このことについては後述する。なお、これらのアイデアが、教師からではなく子どもたちから発せられたものであることを申し添えておく。
- ⁸ NPO 法人グローバルプロジェクト推進機構理事長高木洋子氏の証言による。なお正式な参加校のデータは高木氏も把握していないという。

⁹ この知名度の高まりは、2003 年に NPO 法人グローバルプロジェクト推進機構が主催した「第 10 回 iEARN 国際会議 in Japan (2003 年 7 月 21 日から 25 日、淡路夢舞台国際会議場にて)」の実施が大きく寄与している。この会議には、海外から 55 カ国 332 名、国内からは 604 名(1 日のみの参加を含む)計 936 名が参加し、いくつかのマスメディアにも取り上げられた。なお国際会議について詳しくは、<http://2003japan.jp/> を参照のこと。

¹⁰ 具体的には、インタビュー内容をカードに書き出し、KJ 法によりエッセンス抽出を図った。なおこの分析時には、本論文の筆者 3 名のほか、NPO 法人グローバルプロジェクト推進機構理事長の高木洋子氏にも参加していただき、さまざまな助言を受けた。なお KJ 法については川喜田(1967)を参照のこと。

¹¹ インタビューはすべて佐藤が担当した。

¹² A 氏、B 氏は公立、C 氏は私立の先生である。A 氏は ICT には詳しいが英語は不得手、B 氏は英語、ICT ともに詳しい。C 氏は英語は堪能ながら ICT は不得手である(ただしすべて自己申告による)。なお今回の調査では、3 名ともテディベアプロジェクトの成功体験を基に、インタビューに答えてくださった。これはインタビュー協力者の人選時に意図したものでなかったが、結果として失敗体験を持つ方のデータが得られなかったことは、今後の課題としたい。

(引用文献)

川喜田二郎, 1967 『発想法 創造性開発のために』中央公論社。

岸原史明, 2003, 「テディベアプロジェクトで生まれた平和のための友情について」, 『Proceedings of 10th iEARN Annual Conference』, pp.127-130.

村上芳子, 2002, 「iEARN プロジェクト(テディベアプロジェクト)」, 『2002PC カンファレンス論文集』

森田雅浩, 2003, 「おっさんでもできる国際交流 テディベアプロジェクトを通して」, 『Proceedings of 10th iEARN Annual Conference』, pp.155-158.

納谷淑恵・増田恵理香・岡本和子・上野浩司, 2003, 「国際交流学習の実践を通じた見た iEARN 国際会議 日本とロシアとのテディベアプロジェクト交流から」, 日本教育工学協会, 『2003 年沖縄大会研究発表論文アブストラクト集』, p.27.